

平成27年度 鳥取県立農業大学校評価システムシート：中間検討（H27.9.18）

評価基準（達成度）

- A 100%以上達成
- B 80～99%達成
- C 60～79%達成
- D 40～59%達成
- E 39%以下の達成

重点目標		学生・研修生の円滑な就農の支援 1個別経営計画作成のための個別指導強化 2農業法人等の求人情報収集と関係機関との連携による自営就農及び雇用就農の支援強化				B 80～99%達成 C 60～79%達成 D 40～59%達成 E 39%以下の達成		
課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
1	新規就農者の育成	1 H26年度卒業生は、20名中、自営就農5名（含、研修後就農）、雇用就農11、農業関連企業団体就職1、一般企業就職2、未定1。近年では非常に高い就農率であった。 2 非農家出身学生が多い中、農業法人等からの求人が増えており、雇用就農割合が高まっている一方、短期間に退職した内容の情報も目立ち、雇用就農の定着につなげる対応の必要性がある。	1 求人・求職者情報の農業法人等との共有による雇用就農の促進 2 雇用就農の定着支援	1 関係機関との情報共有を進め、雇用就農を促進する。 ・農業改良普及所等関係機関への雇用就農を希望する学生の情報提供 ・農業法人等訪問による雇用情報の収集 ・農業法人等を招いての雇用就農相談会の開催（評価指標） ・農業法人等の訪問1回 ・雇用就農相談会の開催2回 2 雇用就農者訪問による就農定着支援、就農意識と農業の実践感覚醸成のための1年次の農家実習派遣を勧める。 ・過去5年間の卒業生の動向は握（アンケート調査の実施） ・昨年度卒業した雇用就農者への面談支援 ・卒業生情報を職員間で共有できる体制づくり ・1年次の農家実習派遣の実施（評価指標） ・雇用者及び雇用就農者の訪問1回 ・1年次農家実習派遣の実施率50%	1 ・各コース担任から普及所や法人等に問合せしたり、普及所から雇用情報の提供が数件あった。 ・7/21に雇用就農相談会を開催し、農業者等16件と学生22名の参加を得た。また、雇用就農した卒業生2名の体験発表と意見交換を行った。 2 ・雇用就農した昨年度の卒業が転職（再び雇用就農）するとの情報を得て急ぎ面談したが既に決心済みであった。 ・1年生の農家実習派遣4名（含、予定：小西大、高濱、村上、谷川）			2雇用就農の定着支援について ・2年間くらいのサポートが必要。一般に雇用就農先は従業員（同僚）も少ない場合が多く、相談相手ができない。 サポートの実施に当たっては、卒業するまでに学校が相談を受ける体制を整えている旨を伝えておいてほしい。 相談内容によっては、雇用側と情報共有することによる支援が有効な場合もある。 ・離職率が高いのは農業だけの問題ではないので、定着支援は2年間もは必要ない。 ・スムーズな雇用定着につながるよう、採用決定後に可能な範囲で本人情報の提供があるとよい。 ・アンケートのねらいを明確にして実施してほしい。退職の要因だけでなく、継続して勤められている要因も調査すべき。 ・農家留学研修等の実施に当たっては、雇用就農先候補あるいはその地域で実施し、その中で雇用就農後のその地域との関係作りにつながるような配慮を望む。
2	学生の確保	1 入学生数は平成23年度以降、定員割れが続いている。 2 H22～27年度の入学者数は、33、26、26、25、23、23名。	1 学生募集活動とこまめな農大情報の発信	1 オープンキャンパス(3回開催)、高校の教員対象の説明会、高校訪問に加えて地域農業後継者情報を積極的に収集する。 2 ホームページの積極的情報更新。 3 農業高校との関係作り（例：修農祭等の行事交流など） （評価指標）学生入学者数 定員30名確保	1 ・オープンキャンパスを2回開催し、39名の参加を得た。 2 ・ホームページ情報の定期的更新（校長つれづれ、農大日記）			
3	学生の営農技術向上	【養成課程共通】 1 学生の就農意欲や体力、学力は千差万別で、専攻実習での技術習得には個々の能力に応じたきめ細やかな指導が必要である。 2 営農技術のなかには、施肥量の決定や農薬の希釈など、計算能力が求められるが正確に計算できる学生が少ない。 3 多様化する農業形態のなかで営農するためには、コースを枠を超えて幅広い知識と技術を身につける必要がある。またモノを作るだけでなく、「売る」ことも意識させることで経営感覚をもった農業者を育成する必要がある。	1 学生個々の状況に応じた個別指導の充実 2 計算能力を含めた基礎学力の向上 3 幅広い農業知識の習得と販売実習による経営感覚の向上	1 各コース毎に「理解度アンケート」を実施し、学生と職員の共通認識を図り、特に学生の苦手分野を克服するための指標として活用する。 （評価指標） ・理解度アンケートの実施（2回）とそれを基にした個別指導（随時） 2 1年生を対象とし基礎学力（計算、単位など）の把握と学力補完のための補講を行う。 （評価指標） ・学力補完補講（20回） ・学力テスト（随時） 3 「校内技術競技」を行い、各コースから出題される問題（筆記・実物鑑定）を解きその点数を競う。また校内外で「農大市」を実施し、商品PR方法を学び、対面販売を行うことで消費者ニーズを把握する。 （評価指標） ・校内技術競技実施（2回） ・農大市実施（校内7回、校外4回） ・修農祭での販売（1回）				1 学生の個別指導充実について ・社会人としての基本を身につけ、自主性をもって行動ができるような人材育成が必要。 3販売実習について ・以前は大阪の方で実施しており、一般のお客さんの反応に直に接することができた。JAなどでは、市場の協力も得て京阪神での販売促進をやっており、それらと連携することで学生がお客さんの反応をより実感できる機会になる。

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
		<p>【果樹】</p> <p>2年間の限られた期間で、永年作物である果樹の栽培技術を習得する事は困難である。よって、ほ場の管理運営について、学生個々が主体的かつ責任を持って関わる必要がある。また1年時は幅広く様々な樹種の管理を経験させるとともに、徐々により専門的な内容に触れる機会を持たせる事が必要である。</p> <p>新品種や新技術を積極的に導入し、生産現場のニーズに応じた技術習得を行わせる必要がある。</p>	<p>1 ほ場管理に係る学生の自覚・責任感の醸成</p>	<p>1 「2年時」</p> <ul style="list-style-type: none">各学生の担当樹種を決定し、各樹種に係る作業を行う際には目的、方法等を該当学生に説明させる。ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ外の課題設定、実施、進行管理を徹底させる「1年時」2年生のﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄに係る調査等の補助を行わせる「1, 2年共通」ｸﾞｰﾄﾞ二十世紀については全学生に担当主枝を割当て、年間管理を責任を持って完結させる（評価指標）作業前説明の評価→理解度チェックの活用（2年生全員）ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ中間検討会の実施（2年生全員）ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄに係る調査補助等の実施（1年生全員）	<p>1</p> <ul style="list-style-type: none">各樹種の主査が作業前の説明を行ったが、個々の理解度の差が大きい。「理解度チェックシート」を活用して、説明方法や理解度の向上を図るﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄの中間発表会を1回行った（6/16）。今後も実施する予定。ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄに係る調査等の補助を1年生全員が最低1回は行っており、今後も継続して行う予定			
			<p>2 新品種、新技術の導入と栽培技術の向上</p>	<p>2</p> <ul style="list-style-type: none">ナシのｼﾞｮｲﾝﾄ仕立てを計画的に導入し技術習得を図る新品種、新技術に関する研修会等への出席、現地研修の実施をとおして、学習意欲の向上を図るナシコンクール（梨記念館主催）の入賞を目標としてコンクールへ出品するとともに、新品種の栽培技術習得を図る（評価指標）研修会等への出席 4回／年ナシコンクール出品	<p>2</p> <ul style="list-style-type: none">ナシ新品種研修会等出席（3回）ナシコンクール出品（新甘泉）			
		<p>【野菜】</p> <p>コースの学生15名のうち、農業高校以外の出身者が7名(47%)、非農家の学生が8名(53%)を占めており、農業に関する基礎知識及び技術の習得支援を進めている。</p> <p>将来的な独立就農の意向を現段階で6名(40%)の学生が示しており、実習のレベルを個別の就農目的に合わせて充実させることも重要である。</p> <p>有機栽培や6次産業化への関心を示す学生もあり、これらのニーズに対応した実習を行う必要がある。</p>	<p>1 栽培基礎技術の向上とプロジェクト学習による実践力の養成</p>	<p>1 1年生は露地圃場での少量多品目栽培および施設での共同管理を行い、栽培の基礎技術を習得させる。2年生はプロジェクト研究において、各自の興味や実情に合わせた課題設定を行い、主としてハウス1棟を1人で管理する。（評価指標）</p> <ul style="list-style-type: none">栽培品目 露地5品目/人 施設1品目/人就農を目指す学生は県特産品目の白ネギ、ブロッコリー、スイカを規模を拡大して栽培トレーサビリティ（栽培管理履歴）記帳の実施プロジェクト学習の達成度：総合評価点 80点以上	<p>1 野菜栽培の実践学習（1年生）</p> <ul style="list-style-type: none">1年生は露地5～10品目、ハウス品目1～3品目を栽培後継就農予定の学生は自営品目を想定して白ネギ、ブロッコリーの栽培を実施担当品目の栽培管理履歴の記帳を実施（2年生）6名中2名の学生のプロジェクト栽培試験が終了。残り4名は試験中。今後、試験進捗に合わせてデータ取り纏めの指導を行う。			
			<p>2 農業基礎知識の習得支援</p>	<p>2 日本農業技術検定の認証取得をめざした技術解説や専攻ゼミナール等の基礎教育を実施する。（評価指標）</p> <ul style="list-style-type: none">1年次終了までに3級、卒業までに2級の取得	<p>2 農業資格取得（1年生）</p> <ul style="list-style-type: none">2級取得者：2名、3級取得者：5名（2年生）2級取得者：3名、3級取得者：3名			
			<p>3 環境保全型農業（特裁・有機）の理解と実践</p>	<p>3 有機栽培実習と、鳥取県特別農産物の認証を受けた栽培を実施する。（評価指標）</p> <ul style="list-style-type: none">有機専用圃場における実習（15品目/年）特裁認証（5品目）野菜加工食品の製造および販売（1品目）	<p>3 有機栽培</p> <ul style="list-style-type: none">有機圃場で現在までに15品目を栽培ジャンボピーマン、プリンスメロン、アールスメロン、ミニトマト、スイカで特栽培認証の栽培を実施トマトペースト（1次加工）を製造			

課題 番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成 度	次年度の課題と 改善策	外部評価委員会からの コメント
		【花き】 基礎技術の習得を中心に進めているが、実用化された新技術や本県に適する新品目の導入を行い、栽培技術の向上を図る必要がある。 また、花は嗜好品であることから、必ずしも生活に必要なものではないが、身近に花がある生活をするには、様々な人に花の良さを理解してもらう必要がある。	1 栽培基礎技術の向上と花が売れる時期を目標とした栽培の徹底 2 花き品評会への参加、県内先進農家への視察 3 花育活動の取り組み	1 学生の担当品目を決めて栽培管理を行い、基礎技術を習得させる。特に2年生は能力に応じてプロジェクト課題設定を行い、しっかりしたまとめが出来るように進捗管理を行う。また、花き部門で営農を目指す場合、花の消費が多い時期（お盆、彼岸、年末）に出荷することも重要であることから、出荷時期を意識しながら栽培管理を行う。 （評価指標） ・作業の確認と作業日誌の記載の徹底 ・プロジェクト活動の進捗管理 2 10月に開催されるイベント「花のまつり」の中で、鳥取県花き品評会が開催されるが、学生が栽培したものを出品する。また、県内生産者の高い技術に接することで、意識向上を図る。 （評価指標） ・花き品評会への出品参加 1学生あたり1点以上 ・県内先進地視察 2回 3 「花育」活動を行うことによって、自身の花に対する理解を深め、また、他の人に花を良さを理解してもらうにはどのようにすれば良いか体験をする。 （評価指標） ・「花育」活動 2回	1 作業の確認は専攻のある午前と午後に行っており、作業日誌についてもチェックをしながら、気になることはコメントを書いている。また、2年生のプロジェクトについては日々進捗管理を行っている。 2 花き品評会には1学生あたり1点以上の出品予定（品評会は10/23～25）。県内先進地視察は2回実施予定（6/5伯耆町、9/30米子市・大山町）。また、県等が主催している各品目部会、研修会にも積極的に参加している（コリ部会、花壇苗部会各1回）。 3 「花育」活動については2月に近隣の保育園2カ所で実施予定。		1 プロジェクトについては、学生により取り組みに濃淡があるため、積極的に取り組むよう日頃から声かけを行う。 2 品評会への出品、先進地視察等、学生が意欲向上につながるよう指導する。	
		【作物】 1 トラクター、田植機、コンバイン等の機械操作は未経験の学生がほとんどである。 2 有機栽培に漠然とした興味を持って入学する学生が多いが、具体的な栽培管理は未経験である。 3 法人就農を目指す学生も多く、水田農業の複合経営で取り入れられることが多い白ネギ（秋冬）やブロッコリー（秋冬）の栽培技術の習得も必要。	1 農業機械操作技術の習得 2 有機栽培技術の習得 3 白ネギ、ブロッコリーの栽培技術習得	1 農大の管理ほ場面積を維持しつつ、近隣農家から機械作業実習ほ場の提供を受け、水田での作業面積を確保する。また、トラクターでの耕耘技術競技を実施し、技能向上を図る。 （評価指標） (1)理解度アンケート（よくできる、できる、もう少し、できないの4指標）でのトラクター、田植機、コンバインの操作に関する各評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。 (2)耕耘技術競技の実施 50分/10a以内の学生50%以上 【参考】前年平均時間49分47秒 2 有機栽培技術導入ほ場を前年並みに確保。 （評価指標） 理解度アンケートでの有機栽培技術に関する項目で「できる」以上の評価が80%以上。 3 白ネギ（秋冬）、ブロッコリー（秋冬）を栽培 （評価指標）栽培面積の維持 理解度アンケートでの白ネギ、ブロッコリーの栽培に関する評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。	1 農大の管理ほ場面積は維持し、近隣農家から機械作業実習ほ場の提供を受け水田での作業面積を確保している。しかし、田植機が6月初旬に故障したことから昨年実績の7割程度の実習作業実績となった。 （評価指標） (1)理解度アンケート集計結果（7月実施） 「できる」以上 ・トラクター 57% 4／7 ・田植機 57% 4／7 ・コンバイン 43% 3／7 (2)耕耘技術競技 未実施 2 有機栽培技術導入ほ場を3ほ場（前年と同じ）確保。 （評価指標） (1)理解度アンケート集計結果（7月実施） ・「できる」以上 0% 0／7 3 白ネギ（秋冬）、ブロッコリー（秋冬）を栽培 (1)理解度アンケート集計結果（7月実施） ・「できる」以上 43% 3／7			

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
		<p>【畜産】</p> <p>1 畜産コースにおいて、非農家出身学生が多数を占める状況では、卒業即自営畜産経営は難しいため、将来的自立も見据えながら畜産関連業種又は農業法人就農に大きく力を入れる。</p> <p>2 畜産関連業種又は農業法人が本学学生に求める人材とは、家畜（牛）の基本的管理技術及び畜産の管理用機械（ホイルローダー等）、飼料用作物関係機械の操作技術を習得した人材である。</p>	<p>1 就農または農業法人への就職状況</p> <p>2 牛の繋養、誘導技術の習得</p> <p>3 家畜管理用機械機械の操作技術の習得、飼料用作物関係機械（ラッピングを主体として）の操作技術の習得</p>	<p>1 農業法人、先進農家との積極交流（訪問、夏期研修等）による就職マッチングを行う。（評価指標）農業法人等就職者率(自立就農含) 100%</p> <p>2 乳牛および和牛の共進会に参加を目指して飼養管理技術の習熟(業界の求める人材育成)を図る。（評価指標）各共進会への出品頭数及び上位入賞頭数</p> <p>3 ①飼料給与・調製、②牛舎内の糞及び敷料の搬出・運搬、③糞乾燥機械④搾乳作業等日々の継続した飼養管理の実施を図る。また、⑤飼料用作物関係機械（耕運～収穫・調製作業）についても可能な限り体験実習を実施する。（評価指標）理解度アンケートでのコンプリートミキサー、ホイルローダー、搾乳機械の操作が日常的にできるまた、ロールラッピング機械の操作が1人でできる以上の評価。</p>	<p>1 法人S牧場において農家留学研修（8/31～9/25）を実施。</p> <p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> 中部酪農共進会に乳牛2頭出品、1年生2人が牛の誘導を行い、1頭が上位入賞（1等賞4席）。 県共進会（9/26予定）に乳牛2頭を出品し、2人が誘導予定。出品前に職員が出品牛への飼料給与方法を指導した。 専門技術者から誘導技術及び毛刈り技術を学んでいる。 <p>3</p> <ul style="list-style-type: none"> 日々の専攻実習において①飼料給与・調製、②牛舎内の糞及び敷料の搬出・運搬、③糞乾燥機械④搾乳作業等日々の継続した飼養管理を実習している。 ⑤飼料用作物関係機械操作（収穫・調製作業）を実習する予定。 7月に理解度アンケートを実施 <p>コンプリートミキサー、ホイルローダー、搾乳機械の操作、ラッピングマシンの操作についてよくできる：80点、できる：60点、もう少し：40点、ほとんどできない：20点、満点を100点としてとして点数化（平均）した結果、ミキサー：56点、ローダ：56点、搾乳操作：12点、ラッピングマシーン20点であった。</p>		<p>1 2年生は、マッチングを目的とした個別農家の訪問を予定している。</p> <p>2 乳牛の誘導と継続出品を図り、和牛についても誘導（調教）と共進会への出品を行う。</p> <p>3 2年生は搾乳実習、ラッピングマシーン操作を実施しているのに対して、1年生は、未実施のためこの部分が低得点である。今後搾乳実習を実施予定。また、1年生は人によりローダーやミキサーの操作に差があるため今後操作技術の向上を図る。</p>	
		<p>【農業機械】</p> <p>1 農業法人への就職や就農を目指す学生にとっては、トラクター、コンバイン等の大型農業機械の運転操作を行う上で、大型特殊免許の取得は必要である。</p> <p>2 農業法人等から農業機械の操作技術のレベルアップを求める意見がある。</p>	<p>1 大型特殊免許の取得</p> <p>2 農業機械の操作技術の向上</p>	<p>1 試験日までの練習期間が限られているため、1年生をグループ分けし、また、練習日を計画的に設定し効率的な練習を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ① 練習期間（6月1日～6月18日）試験日（6月19日） グループ② 練習期間（6月22日～7月13日）試験日（7月14日） <p>（評価指標）1年生の大型特殊免許の合格率（80%）</p> <p>2 農業機械の取り扱いに不慣れな学生を指導対象学生とし農業現場で使用頻度の高い、刈り払い機及びトラクターの取り扱いについて、重点的に実習を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 刈り払い機：重点指導期間（10月：6名）実習（草刈り）5回、確認試験（実技）、習熟度アンケート トラクター：重点指導期間（11月：4名）実習（ロータリー耕耘）5回、確認試験（実技）、習熟度アンケート <p>（評価指標）確認試験の合格点達成率（80%）</p>	<p>1 大型特殊免許の取得（練習方法）</p> <p>*練習計画に沿って練習を行い、主に午後の専攻実習を練習時間に充てた。</p> <p>グループ①（1年生12名）</p> <p>*練習日回数（13日）</p> <p>*合格結果（11名合格、1名不合格）</p> <p>グループ②（1年生10名+グループ①の不合格者1名の計11名）</p> <p>*練習日回数（16日）</p> <p>*合格結果（9名合格、2名不合格）</p> <p>（合格率）</p> <p>*受験者22名中全員が合格</p> <p>注）グループ②の不合格者2名は一般免許試験の再試験で合格</p>			

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
4	社会情勢に即応した実践教育の実施	<p>1 農業現場に即したプロジェクト活動（卒論）の課題設定と、実用技術を意識した取り組みを進めている。</p> <p>26年度のプロジェクト成果のうち生産者の関心が高いナシ新品種の栽培法に関する成果を1件発表した（果樹研究同志会・果樹特技普及員合同研究発表会）。また、実家の農業経営改善に結びつく水稻の施肥試験に取り組んだ成果1件を発表した（農村青年冬のつどい）。</p> <p>2 1・2年とも講義の履修内容として、年2回の地域貢献活動（ボランティア）を位置づけている。</p> <p>26年度は学生41名の内、39名が少なくとも1回、32名が2回以上実施した。</p>	<p>1 実用性の高いプロジェクト成果の確保</p> <p>2 地域社会との関わりの促進</p>	<p>1 実用性を意識した課題設定と実施に努め、学生が就農後に活用でき、生産現場のニーズにも応えられる成果を確保する。 （評価指標）校内発表会以外の情報提供の場を3件以上確保する。</p> <p>2 引き続き地域貢献活動の情報を収集して学生に提示し、取り組みを促す。 （評価指標）学生による地域貢献活動（1人2回）の実施率100%を目指す。</p>				
5	多様な研修制度の運用と研修生のニーズに即した就農支援の実施	<p>1 研修生の目標は、共通して就農に要する技術・経営ノウハウを習得することであるが、各者の状況・背景（希望の形態（自営就農志向か雇用就農志向か）、農地等の基盤の有無、自己資金の状況等）は各々異なる。個々の状況把握を丁寧に行い、各者に最も適した就農に導くことが必要である。</p> <p>2 今年度の研修改編について、担い手農家、受講希望者、関係機関、県内大学等への周知・PRの上、新たな研修制度の積極的活用を促す。</p> <p>3 公共職業訓練（アグリチャレンジ研修）の委託実施にあたっては、研修終了後の進路において、他機関の研修制度の活用が見込まれる。また先進農家実践研修の新規運営においては、研修生就農予定地域での受入体制整備が必須となる。このことから、各関係機関との結節を一層意識した調整、コーディネートが求められる。</p> <p>4 いずれの研修制度においても、漫然とカリキュラムをこなす受け身の研修ではなく、研修生が自らの課題、当面の目標を意識し、限られた期間ながらも有効な研修となるよう工夫を要する。</p>	<p>1 研修生に対する就農サポート体制の充実</p> <p>2 研修制度の情報発信</p> <p>3 研修コーディネート機能の強化</p> <p>4 研修の動機づけ</p>	<p>1 研修開始時・終了時のみならず、研修期間中に個別面談を複数回実施しながら、各研修生に適した就農へのアドバイス、必要な関係機関との調整を実施（就農打合せ会開催等）する。 （評価指標） ・研修終了時の評価アンケート（4段階評価 ◎、○、△、×）に、就農に向けたアドバイス、支援に関する評価を加え、○以上の評価80%以上</p> <p>2 担い手育成機構との連携のもと、県内外就農相談会でのPRのほか、各種会議、研修会等での制度紹介に加え、各市町村、JA、県機関、県内農家等を直接個別に巡回し周知する。 （評価指標） ・新規研修受講者数の定員確保 アグリチャレンジ研修 20名／期 先進農家研修 5名程度／期</p> <p>3 関係機関との調整のもと、各研修生の研修・就農支援を中軸としてコーディネートする研修調整員を新たに配置し、研修制度のつなぎ、各地域での研修受入体制づくりを進める。 （評価指標） ・先進農家研修実施市町村 5市町村</p> <p>4 研修制度別に集合研修を定期的に実施し、各研修生から研修状況報告や自らの当面の研修課題・目標等の発表の場を設け、必要なアドバイス、軌道修正を行う。 （評価指標） ・発表内容の確認</p>	<p>1 7月開講研修より、受講申込者への事前面談を実施し、就農に対する考え方に加え、家族状況や就農基盤等に関する詳細聞き取りを実施。研修期間中も各者の状況に応じて個別面談、関係機関との就農打合せ会を随時実施中。 ・研修終了時評価アンケート 就農に向けたアドバイス・支援に関する評価 ○以上の評価：100% （7月修了者）回答 4/6 1月開講6か月コース 4名(既就農者1名) 4月開講3か月コース 2名</p> <p>2 就農相談会（県内4回、県外4回）、生産部等役員会（3回）、各種研修会（4回）、各種担当者会議（11回）、農家訪問（26件）により周知。 ・アグリチャレンジ研修 1期申込者数 7名（9.10時点） ・先進農家実践研修 1期実施見込者数 2名（9.17時点）</p> <p>3 8月より研修調整員配置。各地域にて生産部を受入主体とした研修実施体制づくりの働きかけを展開中。</p> <p>4 毎月1回ペースで集合研修を継続実施中。各自の毎月の研修目標、進捗確認を主に実施している。</p>			